


業の予習、レポートの調べもの、使い方は人それぞれであろう。しかし、どの分野であれ、大多数の学生にとって大学での最終目的は卒業論文を書くことである。その時、大学図書館はもっとも真価を発揮する。論文はこれまでまだ誰も述べたことのない新しい知見を打ち出さねばならないので、どうしても先行研究を調べる必要がある、過去の資料の蓄積が大きく物をいうからである。明大図書館には全部で205万冊の蔵書があるという。その中には各大学の紀要、博士論文や修士論文、私家版、非売品、自費出版物など市販されていないものや、市販されていたとしても品切れ、絶版などもはや入手不可能なもの、個人で買うには高すぎるものも相当数含まれているはずだ。

テーマを持って図書館に行こう。きっとどんな文献でも探し出すことができる。オンライン目録検索で見つからなければ、図書館員に尋ねてみよう。近年、図書館相互のネットワーク、外部データベースのおかげで、たとえ明大図書館で見つからなくても、国内はもとより、海外の機関からでも資料を取り寄せることができる。図書館に親しめば、(図書館のほうでも、新入生のための図書館案内、ゼミツアー、総合講座「図書館活用法」など利用者に親しんでもらおうと努力をしている)君の学習・研究に新たな地平が開けるだろう。いや、君が社会に出たのちも、大学図書館は君のデータベースとしてずっと強い味方であり続けるだろう。

「図書館利用」における 教員からのアドバイスについて

理工学部情報科学科 教授 玉木 久夫

 図書館利用のノウハウのようなものについては、図書館から利用の手引きが提供されているであろうし、図書館学の専門家でもない私がこのような題目で書くとするれば、自分の体験に基づいて感じていることを書くしかないだろう。幸い、図書館については良い思い出をたくさん持っている。とりとめのない文章に副題をつけるとすれば、「図書館探検の勧め」となるだろうか。

私の出会った最初の図書館は、洗足池のほとりにある図書館であった。小学生のころから利用していたが、中学校に上がったからはこの図書館が中学校の隣にあったこともあって、本当によく利用した。正確な著者名は忘れたが何とかスキーさんの「数学おもちゃ箱」は、その続編も含めて繰り返し借り出した。夏目漱石や翻訳ものの小説から、「ゲゲゲの鬼太郎」にいたるまで、毎週のように何かしら借りては読み耽った。今にして思うと、自分という人間の少なからぬ部分がこの図書館通いによって形成されたに違いない。大学に進学するとそこには当然ながら立

派な図書館があったのだが、何故かあまり記憶にない。その代わりに行動範囲が広がったために、あちらの町こちらの町の図書館を覗いて回ったことを憶えている。

人生の半ばで思い立って、海外でもう一度学生をすることにしたが、ここでも図書館にはおおいにお世話になった。大学の図書館がすばらしく充実していて必要な専門書はほとんどそこで見つけることができた。しかし、それ以上に感激したのはアジア図書のコーナーに、囲碁関係の立派な蔵書があるのを発見したときである。分厚い打碁全集から詰め碁の古典にいたるまで、これだけのコレクションは日本の図書館でもなかなか見当たらない。遠い異国の地でこの出会いに驚くとともに歓喜したことを憶えている。

質の高い情報の集積地である図書館はいわば宝の山である。探検にはうってつけの場である。あなたは、キャンパスの図書館や自分の住む町の図書館の隅々まで知っているだろうか。テレビに氾濫する浅薄なトリビアに飽き、インターネットの情報の海でのサーフィンに疲れたら、さあ探検に出かけよう。まだ足を踏み入れたことのない地下の書庫で運命の一冊があなたを待っているかもしれない。

